

口頭発表「委員会活動から4年生の学年飼育へ」

－総合的な学習における「飼育」の指導－

斎藤弘子* 北原祐子* 杉山亜耶* 高野 富**



1 4年生に位置づけられた飼育活動

(1) 委員会活動から学年飼育へ

本校では平成15年度より「飼育活動」を4年生の総合的な学習の時間に位置づけ指導している。平成14年度までは、本校にも飼育委員会があったが次のような状況が見られた。

- ・委員会活動の中では20名程度の児童で毎日の当番、土日、長期休業日に飼育作業を継続しなければならない大変さがあったこと。飼育委員会担当者の負担も大きかったこと。
- ・動物好きでよく世話をする児童がいる反面、第一希望の委員会ではなかったということから進んで活動しようとしめない児童もいたこと。
- ・校長室ではじめたモルモット飼育（13年度から16年度）では学年を問わず、子どもたちが小動物に癒され喜びを感じる実態が

あったこと。

これらの実態を踏まえ6年間のうちで一度は、児童全員に小動物に触れる体験をさせたいと考え、発達段階を考慮して4年生の学年飼育活動として位置づけた。

(2) 獣医師との連携

今まで関わったことのない飼育指導を4年の担任が引き受けることになった。当初はなかなか指導に自信が持てずにいた。しかし、地域の獣医師が動物の飼育活動を支援するように教育委員会から派遣されてくる制度があった。困ったときには専門的に対処してもらえることがはっきりしていたので安心感を持って、活動することができた。そこで、総合的な学習の時間に位置づけて、飼育体験学習を始めたのである。獣医師との連携がとてもありがたく感じた。

飼育についての基礎知識を得るためのオリエンテーションや、治療などの健康相談、休日の保護者の支援についての説明など、すぐに獣医師にお世話になった。動物たちがいつもと違う様子をしていた時には、すぐに獣医師に調べてもらうことができた。お世話の仕方や掃除の仕方のアドバイスを受けて、専門的な見方から安全性を確かにしていただいた。そのおかげで安心して、飼育活動を継続することができた。「動物たちを、健康に育てたい。」との言葉が子どもからもあがり、改めて子どもたちにとって飼育活動の意味の大きさを痛感した。

2 総合的な学習の時間における指導計画

総合的な学習の時間に「飼育を通して」と単元を設定し、年間計画(後述)を作成した。

(1) 保護者への説明と支援

1年間の飼育活動が終わるころ、次の学年の子どもたちに引継ぎ集会をおこない、学校は児童ならびに保護者に向けて飼育の準備を伝える。新学期、保護者会で飼育活動を学習に位置づけていることを説明し、飼育の目的と方法を示して保護者のボランティアとして休日の世話の協力を求める。その際に獣医師にも説明に同席してもらう。そのこともあって、4学年の親子は、親子の会話を大事にしながら、毎休日に学



校まで世話に来てくれている。この飼育の方法になってから、保護者は飼育に教育の意義を感じ、主体的な姿勢で協力していただけなので、休日の世話の問題は殆どなくなっている。

(2) 獣医師による訪問授業



新学期になると、まず新4年生は獣医師による飼育ガイダンスを受ける。その中で獣医師から動物の気持ち、扱い方を聞いて、実際に一人一人が動物を抱く触れ合い体験を行う。動物とかかわる経験がなかった子どもが動物を抱くのを怖がることもあるが、獣医師と事前訓練を受けた保護者により動物が子どもを怖がらないように配慮しながら、子どもに動物を抱かせる。このことで子どもたちは、動物も自分たちを怖がっているということに気づき、言葉のない動物の気持ちを察することの大切さに気づいていく。

子どもたちの動物への興味が高まる頃、自分たちで動物について調べ学習を始める。その際、獣医師の定期訪問を活用して、調べたいことを獣医師に質問する。質問は、学校の動物たちの健康から、動物一般への疑問、老年になることの意味などいろいろ

出る。何気ない質問にも獣医師が普段聞くことができない知識を答えてくれるので、驚きと感動を感じるができる。本年度は、「なぜ獣医師になったのか？」との質問がでて、獣医師が原体験を語る話などが聞けた。子どもたちにとっては小学生の自分の将来に繋がる話であり、まさに自分の生き方を考える時間となった。今では「将来、獣医師になりたい。」という子どももいる。動物飼育が自分の生き方を見つめる学習へと変わった。総合的な学習の時間の目的そのものとも言える。

(3) 日々の世話



親子当番後チャボと楽しむ

子どもたちは最初、動物の糞尿がころがる飼育舎に入るのを嫌がるが、やがて動物に気持ちを移入していく。あるときの当番が、あまり熱心に掃除をしなかったが、その班に対し、他の班から非難が相次いだことがあった。しかし、次の日にはすっかり飼育舎はきれいになっていた。その子たちからは、「自分たちがいけなかった。」と真摯に反省する言葉が聞かれた。これは「掃除をする」「きれいにする」ということがルールだからということ以上に、「汚いと動物がかわいそう」との話し合いから非難されたということを理解できたからである。単に友達同士の個人攻撃的な非難ではなかった。まさに道徳的な価値の高い体験だったと思える。このような場面に多く出合うところに本学習の意義も大きいといえる。

(4) 死に際して

本年度、チャボとウサギが相次いで悪性腫瘍で死亡した。このような場合、必ず獣医師が治療ならびに解剖をして、死因を子どもたちに説明し、なぜ死んだかを納得さ



07-05

せてくれた。これは子どもたちの悲しみを少しでも軽くし、かつ理科学的な学習となるような配慮からである。この説明のとき、子どもたちはじっと獣医師の話聞き、一人一人が死んだ冷たい動物を抱き、お別れをする。そして、その動物に向けての沢山の想いを手紙に書いてお別れ会を実施した。

動物の死に直面してから子ども達は、「ぼくは何をしてあげられる?」「何をしたらいい?」と考えることが多くなり動物のこ



07-06

とについて本やパソコンで調べたり、動物の様子を気にして飼育舎を見に行くことが増えた。そして、前年に世話していた5年生に世話の仕方を再度教えてもらいに走った。動物の死に直面し、関わる子どもたちを見ていると動物をかわいがって世話をする効果の大きさに驚かされた。そのときの作文にも、動物に対する愛情の深さが見て取れる。

作文「かわいそうなイエロー」

ぼくは、イエローがなくなる前日にし育をしていました。それでその前日にし育をしている時、いつもだったらパクパクエサを食べているのに、全く食べていなかったの食べさせようとしたけれどダメでした。し育が終わった後イエローを見たら、ぐったりしていたので、みんなに「ぐったりしてない。」と言ったら、「ねむそうだからそっとしてあげよ。」と言って、そのままにしてしまいました。そのよく日になって、朝遊んで教室に帰ろうとしたら、だれかが「イエローが死んだよ。」と言ってぼくはダッシュでイエローの所に行くと、イエローがたおれていました。そして先生が来ました。その後、し育当番の子全員でイエローをダンボールの中に入れて持っていきました。それでぼくは運んでいる時、ちょっとなみだを出してしまいました。ぼくは、イエローの体をさわってみるといつもよりへんな感じで、死んでしまうってこういうことなんだなあと思いました。その時は死んでしまったのは、ぼくのせいかなと思って、とても悲しかったです。ぼくはその後死んでしまった事の反省をしました。エサの葉っぱが悪かったのかななどいろいろ考えました。その日のし育の時、つまのブラットが、イエローをさがしていました。それを見て「ブラットかわいそうだなあ。」と友達と話していました。それが何日も、続きました。その数日後にじゅう医師の先生がイエローは「がん。」だったことを知らせてくれました。そしてある日新しいおんどりが来ました。おんどりの名前は、バロンに決まりました。それからブラットはバロンといっしょの部屋でくらすことになりブラットは口ではしゃべれないけれど、うれしそうにしていました。それでも、イエローの死んでしまったことは、わすれられません。イエローに手紙を書いた時は、イエローに届いているかなあとか、イエローにまたあいたいなあと思っていまいた。イエローには天国でも元気にしてほしいです...



07-07

イエローを抱いて別れを惜しむ

(5) 飼育活動の効果

単元の計画では、3月末に4年生が企画をし次の学年への飼育の引き継ぎ集会を実施することが計画されている。ここで4年生は、一年間つちかった「動物の性格や世話の仕方」を3年生に説明し、質問に答える。飼育の引き継ぎ集会では次のような質問があった。「動物が病気になってしまったらどうするのか？」である。4年生は、「まず、体の様子やうんちやおしっこをチェックして下さい。」「いつもと様子が違っていたら、すぐに先生に知らせて下さい。先生が様子を見て獣医さんと呼んでくれます。」と答えた。また「ウサギが暴れたらどうするか？」との問いに「うさぎが恐がらないように姿勢を低くして、やさしく抱

いてあげて下さい。安心させればおとなしくなります。」「チャボのイエローとアレックスは雄同士で目が合うとけんかをしてしまうことがあるので別々の部屋にしています。」など体験を基に心から出た言葉で的確に答えていた。

動物との関わりを通して、始めは嫌がっていた動物たちの糞尿のお世話も自然にできるようになった。「きれいにしてあげないと、動物たちがかわいそう。」という気持ち広がりが、小さな動物にも愛情を感じて接するようになった。これは、自分以外の動物や友達にも心を向けられるようになった現れであり、飼育活動が情感を養っている成果である。

作文「大好きな動物」

(前文省略)・・・これから四年生になる、今の三年生にわかるように飼育を通して分かったことを教えていきたいです。一学期の私のように、一人にまかせず、みんなで協力して行うことがすばらしいことや、もうウサギや鳥が入院したり、死んじゃったりしないようにどんなことをすればよいか、好きな食べ物や私たち班が考えた新メニューなど全部教えていきたいです。そして、動物がどんな目で私たちを見ているのか残りわずかな時間でも、考えていきたいです。

(6) 最後に

飼育を通してまずは動物のことを学習するわけですが、必ずそこには友達との協力があります。最初は自分中心だった考えが、段々動物の立場に立って解決に至ります。友達同士の認め合いも生まれていき、飼育がよりよい関係づくりにもつながりまし

た。はじめは「ちょっとこわいな」と言っていた動物たちに、だんだんと慣れて、今では家族の一員になりました。子ども達が小さなお父さんお母さんになってたくさん愛情を注いでお世話しています。

(東京市立保谷第二小学校 *教諭 **校長)



異学年交流。1年生へのふれあい指導



総合的な学習における「飼育」の指導

1. 単元名 「飼育を通して」(第4学年)

2. 単元の目標

- ・動物の飼育体験を継続してすることにより、生命尊重の心を育てる。
- ・動物に対する興味関心を高め、飼育の過程で生じる様々な課題に創造的に取り組める資質を育てる。

3. 評価規準

学習活動への 関心・意欲・態度	総合的な思考・判断	学習活動に関わる表現	知識を応用し 総合する能力
○動物の飼育に興味をもち、自分から進んで世話をしようとする。 ○思いやりのある態度で動物に接したり交流したりしようとする。 ○友達や3年生に飼育の仕方や様子を伝えようとする。	○毎日の世話は苦労も多いが、その地道な活動が命をつないでいることを考えることができる。 ○生き物と人間の関係について調べたことをもとに、相互のかかわりについて考えることができる。	○体験したことを様々な方法でほかの人に伝えるためまとめることができる。 ○引継ぎ集会の計画・実行にあたり自分なりに伝え方を工夫することができる。	○動物の世話の仕方はそれぞれ理由があり、そのときの状態に応じた接し方に気づくことができる。 ○生き物の特徴や人との違いに気づくことができる。

4. 年間指導計画〈40時間扱い〉

- 4月…初めての飼育活動開始、仕事の手順、当番のローテーション、休日飼育等の確認
保護者会での説明(生命尊重、使命感、心の成長、親子飼育ボランティアについて)
 - 5月…次の学級への引継ぎ集会 飼育入門オリエンテーション(獣医との連携)
 - 6月…動物の体や世話の仕方の調べ学習、初めての飼育当番についての作文
 - 7月…夏の間の飼育方法の確認、夏休み中の飼育について(仕事内容・当番の確認)
 - 9月…動物教室(獣医との連携)
 - 10月…飼育プロジェクト(疑問に思ったこと・改善したいことをテーマにし、調べて発表する)
 - 11月…1年生に動物の特徴や抱き方を教えよう
 - 12月…冬の間の飼育方法の確認、冬休み中の飼育について(仕事内容・当番の確認)
 - 1月…引継ぎ集会の持ち方、プログラム・資料作り
 - 2月…3年生への引継ぎ集会
 - 3月…3年生飼育見習い期間(3年生と共に飼育をする)
- ※休日も含め、毎日の常時活動を当番制で実施する。

5. 他教科との関連

- ・国語…体験したことから文章はあふれるように出る。飼育作文教材と関連させた指導が効果的である。
- ・理科…季節による動植物の変化の単元の、生命の連続性と関連させる。
- ・道徳…弱いものを支配しようとする潜在的な心情や独占欲に気づくことで、初めて相手の立場を思いやる心が育つ。「～してあげる」から「～してほしいのかな」という同等の立場まで深まっていくことで対等の関係ができる。ここまで意識が高まる飼育は、道徳的価値の高い体験活動といえる。